

○永平寺に伝わる朝鮮王朝時代の仏画

- ・名 称 けんぽんちやくしよくさんたいしやくてんぞう
絹本著色三帝釈天像
- ・員 数 1 幅
- ・所 在 地 吉田郡永平寺町志比 5-15
- ・所 有 者 大本山永平寺
- ・法量／時代 縦 115.5 cm×横 76.7 cm／ 成化 19 年（1483）
- ・特 徴

本図は永平寺所蔵の李朝絵画である。画面下端中央の銘文から、李氏朝鮮第9代国王 成宗の時代、成化19年（1483）に、制作されたものであることがわかる。内容から、貞熹王后（成宗の祖母）の病氣平癒を願って製作されたと考えられる。

画面上段中央と下段左右に描かれた帝釈天3尊はいずれも宝冠をかぶり、両手で扇を執り、宝座に坐す姿で描かれている。

帝釈天3尊をひとつの画面に描くということは珍しく、神話に登場する建国三神を重ね合わせて描かれたと推測され、王后の病氣平癒とともに、王朝のさらなる安泰への願いが込められていると考えられる。

赤や紫・緑、青など色彩豊かで、繊細・優美な画面であり、銘文の内容から宮廷絵師が手掛けた作と考えられ、李朝仏画を代表する作品である。



○永平寺歴代和尚の肖像画

- ・名 称 えいへいじれきだいそしぞう 永平寺歴代祖師像
- ・員 数 9幅
- ・所 在 地 吉田郡永平寺町志比 5-15
- ・所 有 者 大本山永平寺
- ・法量／時代

<small>いいち</small> 絹本著色以一和尚像	縦 73.7×横 37.7 cm
<small>きじゆん</small> 絹本著色喜純和尚像	縦 73.6×横 37.2 cm
<small>そうご</small> 絹本著色宋吾和尚像	縦 73.8×横 37.4 cm
<small>りょうかん</small> 絹本著色了鑑和尚像	縦 73.3×横 37.5 cm
<small>けんこう</small> 絹本著色建綱和尚像	縦 71.3×横 36.5 cm
<small>けんぜい</small> 絹本著色伝建擗和尚像	縦 109.0×横 50.1 cm
<small>こうしゅう</small> 絹本著色光周和尚像	縦 88.6×横 42.4 cm
<small>そうえん</small> 絹本著色宗縁和尚像	縦 100.0×横 45.1 cm
<small>い かん</small> 絹本著色以貫和尚像	縦 96.1×横 45.4 cm

室町時代

- ・特 徴 本図は永平寺に「古代歴住頂相」として伝来した、永平寺の歴代住職 9 人の頂相ちんぞうである。禅宗では師の人格がそのまま法として尊ばれ、弟子に伝えられたが、頂相は師から弟子に伝法の証として授けられた。

9人の像主は、永平寺第7代住持じゅうじとされている以一和尚いいち、第8代住持とされる喜純和尚きじゆん、永平寺第9代住持とされる宋吾和尚そうご、永平寺第12代住持とされる了鑑和尚りょうかん、永平寺第13代住持とされる建綱和尚けんこう、永平寺第14代住持とされる建擗和尚けんぜい、永平寺第15代住持とされる光周和尚こうしゅう、永平寺第16代住持とされる宗縁和尚そうえん、永平寺第17代住持とされる以貫和尚い かんである。そのうち、建擗和尚（第14代）像については、像主が判明しておらず、伝建擗和尚像とされている。

いずれの画像も、曲帙きょくしやく上に結跏趺坐けっかふざし、衣の裾を長く前にたらし、右手に竹篋しつぺいまたは拈子ほっすを持つ姿で描かれており、禅宗で描かれる頂相の典型的な形式である。作風から室町時代に制作されたと考えられる。

度重なる火災にあい、現存資料が乏しい永平寺であるが、これらの頂相は、当時の僧たちの姿を知ることができる、きわめて貴重な資料である。



以一和尚像



喜純和尚像



宗吾和尚像



了鑑和尚像



建綱和尚像



伝建擗和尚像



光周和尚像



宗縁和尚像



以貫和尚像

○越前朝倉氏に仕えた曾我派の絵師による禅画

- ・名 称 しほんぼくがかんざんじつとくず
紙本墨画寒山拾得図
- ・員 数 1幅
- ・所 在 地 福井市文京3-16-1
- ・所 有 者 福井県（福井県立美術館）
- ・法量／時代 縦 87.8 cm×横 43.4 cm／室町時代

・特 徴 本図は紹仙しょうせんの描いた水墨画である。紹仙は曾我派の絵師と考えられており、室町時代後期に活躍した人物である。曾我派は代々御用絵師ごようえしとして朝倉氏に仕えたほか、大徳寺を拠点に活動した。

本図は寒山かんざんと拾得じつとくが背中合わせで眠る姿を描いたものである。寒山・拾得は中国の唐時代に天台てんだい山さん国清寺こくせいじに住んでいたとされる伝説の隠者であるが、寒山は文殊、拾得は普賢ふげんの化身ともいわれ、特に禅宗で描かれた。

墨の濃淡をうまく使い分けて描かれており、松の枝に見られるような筆使いには勢いがあり、自由で、即興的である。

朝倉氏ゆかりの絵師の作品として貴重な資料である。



○曾我派の末裔が描いた鷹図屏風

- ・名称 しほんぼくがまつかしわ たかずはつきよくびょうぶ
紙本墨画 松柏に鷹図八曲屏風
- ・員数 1 双
- ・所在地 福井市文京 3-16-1
- ・所有者 福井県（福井県立美術館）
- ・法量／時代 各縦 153.0 cm×横 370.0 cm／桃山時代

- ・特徴 本屏風は、そがちよくあん曾我直庵が描いた屏風である。鷹の絵は戦国武将に好まれた画題であるが、直庵は鷹の絵の名手といわれた桃山時代の画家である。絵師として越前朝倉氏に仕えた曾我派の末裔と考えられており、越前から堺に移り、堺で活躍したといわれている。

右隻には、柏の木の下で、鋭い爪で黒い獣を捕える鷹の姿が、左隻には、松の木の下で岩にとまり、その姿を見つめる鷹の姿が描かれている。

画面四周には金雲が施され、戦国大名に好まれた桃山時代の豪華な画風となっている。



(左隻)



(右隻)

○五百体もの愛染明王像をひとつの画面に描いた珍しい仏画

- ・名 称 けんぼんちやくしよくごひやくたいあいぜんみょうおうぞう
絹本 著色五百体愛染明王像
- ・員 数 1 幅
- ・所 在 地 三方郡美浜町佐柿 26-5（県立若狭歴史民俗資料館に寄託）
- ・所 有 者 宗教法人青蓮寺
- ・法量／時代 縦 55.2 cm×横 27.4 cm／鎌倉時代
- ・特 徴 本仏画は若狭守護武田氏の家臣であった粟屋勝久が、朝倉氏あわやかつひさとの合戦の際に一乗谷から奪ってきた戦利品のひとつと伝えられている。
画面一列に20体、25段にわたって愛染明王あいぜんみょうおうが細かく描かれている。
このように多数の仏像を制作する行為は院政期（12世紀）を中心に盛んに行われていたが、絵画の例はごくまれである。絵画として、また戦国時代の越前・若狭の歴史を考える歴史資料としても貴重である。



○泰澄創建とされる寺院に伝わる聖観音像

- ・名 称 もくぞうしょうかんのんりゅうぞう
木造聖観音立像
- ・員 数 1 軀
- ・所 在 地 三方郡美浜町佐柿 26-5（県立若狭歴史民俗資料館に寄託）
- ・所 有 者 宗教法人青蓮寺
- ・法量／時代 像高 53.5 cm／平安時代前期
- ・特 徴 しょうれんじ 青蓮寺は養老元年（717）に泰澄が創建したと伝えられる真言宗の寺院である。
たいちょう 聖観音立像は青蓮寺の本尊として祀られてきた仏像で、一木造、作風から平安時代前期の制作と考えられる。
中国からもたらされた檀像（だんぞう 白檀やびやくだん 紫檀などの香木を用いて作られた仏像）の影響をうけて、日本にある木材で作られた代用檀像と考えられる。
像高が 53.5 cm と小像であるが、丁寧に彫出された仏像で、右を膝軽くまげ、腰をひねる体のラインは自然に優美に表現され、体躯のバランスもよく、造形的に優れた仏像である。



○豊富な副葬品を有する経塚出土品

- ・名称 みやまでらきょうづかしゅつどひん
深山寺経塚出土品
- ・員数 一括
- ・所在地 敦賀市結城町 10-9 (敦賀市文化振興課分室)
- ・所有者 敦賀市
- ・時代 平安時代・鎌倉時代
- ・特徴 昭和 57 年度に発掘調査が実施され、10 基の経塚が発見されている。経塚遺構の残存状況は良好で、経塚の形状や副葬品の配置がわかる好例である。また、鏡・利器・合子・銭貨等の多彩な副葬品を備え、中でも鏡は和鏡 24 面、湖州鏡 2 面が出土し、一括遺物として資料的価値が高い。現時点では県内最古の経塚で、12 世紀前半に経塚の造営が開始されたと考えられる。なお、越前一宮である気比神宮の東方に、本経塚が位置し、経塚造営にも気比神宮が関与した可能性が想定される。

※ (名称および員数)

- ・一、土器 15 点
- ・一、銅鏡 26 点
- ・一、鉄製利器 35 点
- ・一、金銅小鈴 1 点
- ・一、銭貨 19 点
- ・一、砥石 2 点
- ・一、椀状金属製品 1 点
- ・一、笠形鉄製品 1 点
- ・一、金属製品 (輪状と鉤状) 1 点

以上、101 点



深山寺経塚 1号出土品